

初回面接前後の状態不安の変化と 多元的ブリーフセラピーの効果との関連性

——インテーク面接へのダイナミック・アセスメントの導入——

田 澤 安 弘
本 田 泉

初回面接前後の状態不安の変化と多元的ブリーフセラピーの効果との関連性 —— インテーク面接へのダイナミック・アセスメントの導入 ——

田 澤 安 弘 本 田 泉

目次

- I. はじめに
- II. 対象と方法
 - 1. 心理尺度
 - 2. 対象
 - 3. 群分け
 - 1) 状態不安不変群
 - 2) 状態不安低下群
 - 4. 手続き
- III. 結果と考察
- IV. 総合考察
- 文 献

要旨：

本論の目的は、「発達の最近接領域」を診断する「ダイナミック・アセスメント」をインテーク面接に導入し、変化を生み出す治療的介入が組み込まれたインテーク面接前後の状態不安の変化と、その後に行われる時間制限短期療法としての「多元的ブリーフセラピー」がクライアントの特性不安を変化させる効果との関連性について検討することである。そのため、インテーク前後の状態不安が変化しない不変群と、それが前後で大きく下降した低下群という2群において、クライアントの特性不安がセラピーのプロセスのなかで変化するパターンに違いがみられないか検討を加えた。その結果、両群には、セラピー導入後の特性不安得点の時間的変化のパターンに違いがあることが理解された。不変群においては、プリテストとポストテストのあいだ、およびプリテストとフォローアップのあいだに有意差が認められたものの、ポストテストとフォローアップのあいだに有意差は認められなかった。低下群においては、特性不安のプリテストとポストテストのあいだ、プリテストとフォローアップのあいだ、ポストテストとフォローアップのあいだに、それぞれ有意差が認められた。

I. はじめに

本論の目的は、「発達の最近接領域 (zone of proximal development)」(Vygotsky, 1935) を診断する「ダイナミック・アセスメント (Dynamic Assessment)」(Lidz, 1991; Lidz & Elliott, 2007) をインテーク面接に導入し、変化を生み出す治療的介入が組み込まれたインテーク面接前後の状態不安の変化と、その後に行われる時間制限短期療法としての「多元的ブリーフセラピー (Brief Pluralistic Therapy)」(田澤・近田, 2015; 田澤・近田・本田, 2016; 田澤・橋本・近田・本田, 2016) がクライアントの特性不安を変化させる効果との関連性について検討することである。そのため、インテーク前後の状態不

安が変化しない不変群と、それが前後で大きく下降した低下群という2群において、クライアントの特性不安がセラピーのプロセスのなかで変化するパターンに違いがみられないか検討を加える。なお、インテーク面接におけるダイナミック・アセスメントのためのマニュアルとその単一事例研究については、田澤・近田 (2017) を参照されたい。

II. 対象と方法

1. 心理尺度

状態不安得点および特性不安得点を測定するために、STAI (新版 STAI; State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ) を使用した。本論で扱う数値は、すべてパーセントイルで

キーワード：ダイナミック・アセスメント, 発達の最近接領域, 不安

ある。肥田野ら(2000)は、7パーセントイル未満を「段階1」、7以上30未満を「段階2」、30以上70未満を「段階3」、70以上93未満を「段階4」、93以上を「段階5」と定義し、「段階1」と「段階2」を低不安、「段階4」と「段階5」を高不安と見なしている。

2. 対象

クライアントは、筆頭著者の私設心理相談室のホームページにリサーチの内容を掲載して募集した。相談料は無料であり、来談に際して各自リサーチとセラピーに関する説明と合意を経ている。対象は、本研究のリサーチを開始してから約2年のあいだに来談したクライアントである。そこから、インテークのみで終了したものと、セラピーを中断したものを除く51人が抽出された。すべて女性で、みずから相談室のホームページを見て申し込んだものであり、他機関からの紹介はなかった。19人(37.25%)に精神科・心療内科受診歴があり、その中には入院歴のある5人が含まれている。しかし、治療終了後6カ月以上経過しており、来談時に通院加療中のものは皆無であった。

全般性不安障害やパニック発作などの診断カテゴリーによる選抜や、無作為抽出などの綿密な統制は行っていない。対象となるクライアントは、私設心理相談室の生きた現実場面をそのまま反映するものであり、彼女らが抱えている困難や症状は多種多様である。ただし、統合失調症や内因性躁うつ病などの精神病圏の機能的な精神疾患、知的障害、発達障害などは含まれていない。病態水準としては、精神的健康度の比較的高いクライアントから、神経症水準および境界水準までのクライアントにかぎられる。

3. 群分け

クライアントにはインテークの際に必ずダイナミック・アセスメントを行い、インテ

ーク前後の2回、シングル・セッション内における状態不安の変化を測定した。51人のインテーク前後の状態不安得点の変化は、上昇したもの、変化しなかったもの、下降したものをそれぞれ含んでおり、全体として前後の差は+35点から-74点までの幅が認められた。

そして、この51人の中から、上限の+35点から順に下降して上位20人を選択のうえこれを一群とし、下限の-74点から順に上昇して下位20人を選択のうえこれを一群とした。

1) 状態不安不変群

上限の一群20人に関して、インテーク開始前の状態不安得点の平均値(標準偏差)は64.85(±21.89)、終了後の状態不安得点の平均値(標準偏差)は65.55(±20.60)であった。この群における状態不安得点変化の上限と下限は、+35~-16であった。これら前後の状態不安得点について対応のあるT検定を行ったところ、有意差は認められなかった($t(19)=.242$, n.s.)。したがって、本群においてはインテーク前後で状態不安に変化がなかったといえる。以後、この群を「状態不安不変群」と命名する。すべて女性であり、平均年齢は34.35(±8.36)歳、インテークの平均実施時間は97.90(±26.27)分であった。

2) 状態不安低下群

下限の一群20人に関して、インテーク開始前の状態不安得点の平均値(標準偏差)は80.90(±10.20)、終了後の状態不安得点の平均値(標準偏差)は36.45(±19.51)であった。この群における状態不安得点変化の上限と下限は、-24~-74であった。これら前後の状態不安得点について対応のあるT検定を行ったところ、有意差が認められた($t(19)=13.20$, $p<.001$)。したがって、本群においては、インテーク前よりもインテーク後のほうが状態不安が有意に低いといえる。以後、この群を「状態不安低下群」と命名する。すべて女性であり、平均年齢は36.35(±10.48)歳、インテークの平均実施時間は91.48(±

17.70) 分であった。

なお、図1は、各群におけるインテーク前後の状態不安得点の変化を示したものである。

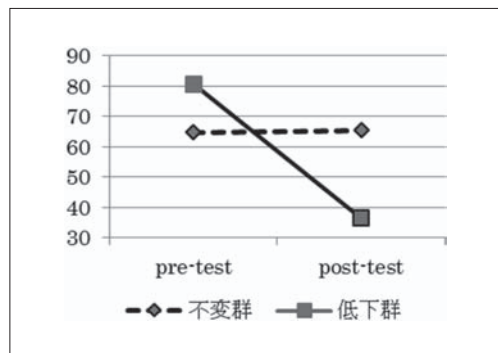


図1 各群における状態不安得点の変化

4. 手続き

すべてのクライアントはインテーク後に多元的ブリーフセラピーに導入され、STAIを用いて特性不安得点が測定された。インテーカーとセラピストは、同一人物である。測定時点は、インテーク時（プリテスト）、セラピーの終結時（ポストテスト）、フォローアップ時の3時点である。フォローアップは手紙や電話によるのではなく、クライアントが来室することによる。

状態不安得点不変群20人の平均セッション回数は4.95 (±1.15) 回、インテークからセッション終結までの平均期間は65.65 (±25.82) 日、終結からフォローアップまでの平均期間は30.84 (±4.28) 日、インテーク時の特性不安得点の平均は81.85 (±23.35) であった。一方、状態不安得点低下群の平均セッション回数は4.45 (±0.89) 回、インテークからセッション終結までの平均期間は61.63 (±23.32) 日、終結からフォローアップまでの平均期間は40.40 (±18.24) 日、インテーク時の特性不安得点の平均は82.40 (±17.21) であった。

Ⅲ. 結果と考察

インテーク前後における状態不安得点不変群と変化群の2群、およびインテーク時、セラピー終結時、フォローアップ時という3時点からなる時間の違いによって特性不安の得点に差があるかどうかを検証するために、独立変数を群と時間、従属変数を特性不安得点とする、混合モデルによる経時的測定データの分析を行った。セラピー終結時とフォローアップ時のデータにそれぞれ数人分の欠損があるため、通常の分散分析による解析は行っていない。図2は縦軸を特性不安得点、横軸を時間として、推定値を用いて両群の変化をグラフにしたものである。群と時間を固定効果、クライアントを変量効果として分析した結果、群と時間とのあいだに有意な交互作用が認められた ($F(2, 65) = 3.21, p < .05$)。したがって、インテークにおける状態不安得点不変群と低下群では、セラピー導入後の特性不安得点の時間的変化のパターンに違いがあることが理解された。

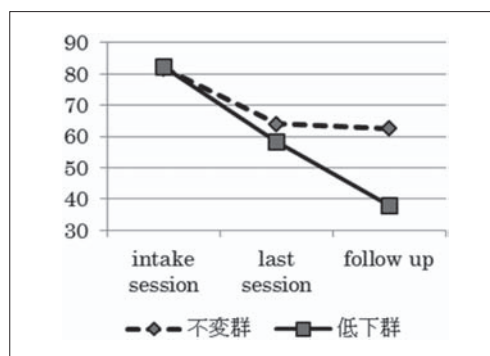


図2 各群における特性不安得点の推移

そのため、時間を固定効果、クライアントを変量効果として、混合モデルによって群ごとに単純主効果の検定を行ったところ、状態不安得点低下群においても ($F(2, 32) = 17.46, p < .001$)、状態不安得点不変群においても ($F(2, 32) = 5.74, p < .01$)、特性不安得点

は時間的に変化していることが理解された。表1に、状態不安不変群における特性不安得点の推定値を、表2に、状態不安低下群における特性不安得点の推定値をそれぞれ示した。

表1 状態不安不変群における特性不安得点の推移

	Estimate	Std. Error	Lower 95%CI	Upper 95%CI
Intake session	81.85	6.92	67.74	95.96
Last session	64.05	6.92	49.94	78.16
Follow-up	62.63	7.66	47.15	78.12

表2 状態不安低下群における特性不安得点の推移

	Estimate	Std. Error	Lower 95%CI	Upper 95%CI
Intake session	82.40	6.67	68.89	95.91
Last session	58.20	6.94	44.18	72.22
Follow-up	37.90	7.26	23.26	52.53

ボンフェローニの修正を加えた多重比較の結果、状態不安得点不変群においては、プリテストとポストテストのあいだ ($p < .05$)、およびプリテストとフォローアップのあいだに特性不安得点の有意差が認められたもの ($p < .05$)、ポストテストとフォローアップのあいだに有意差は認められなかった (n.s.)。

状態不安得点低下群においては、特性不安のプリテストとポストテストのあいだ ($p < .01$)、プリテストとフォローアップのあいだ ($p < .001$)、ポストテストとフォローアップのあいだに ($p < .05$)、それぞれ特性不安得点の有意差が認められた。

以上の結果から、インテークにおける状態不安得点不変群と低下群に共通して言えるのは、いずれの群においても、多元的ブリーフセラピーへの導入後に特性不安得点が時間の経過とともに低下するということである。ただし、両群には変化のパターンに違いが認められ、低下群においてはインテーク時とセラピー終結時のあいだのみならず、終結時から

フォローアップ時にかけてもさらに特性不安得点が低下することが理解された。不変群においては、インテーク時から終結時まで特性不安得点が有意に低下するのは変化群と同様であるが、終結時からフォローアップ時にかけては変化しないことが理解された。

IV. 総合考察

インテーク時に測定された状態不安得点の不変群と低下群には、その後導入された多元的ブリーフセラピーによる特性不安の変化のパターンに違いが認められた。両群は、2カ月にわたる4~5回のセラピー中に特性不安が有意に改善されるという点で共通しているのだが、低下群はセラピー終了後もさらに改善し続けるものの、不変群はその改善が1ヵ月後のフォローアップ時点においても維持されるにとどまるという点で相違していたのである。

このように、ベースラインとしてのインテーク時において、両群には特性不安得点に差がなかったにもかかわらず、時間の経過とともにその低減の幅に差が生み出されている。これを言い換えれば、ブリーフセラピーに導入された場合、インテーク前後における状態不安の下げ幅が小さい群よりも大きい群のほうが、セラピー終了後も特性不安がより減少していく傾向があり、短期的には特性不安の軽減率がより大きいということになる。

この結果から言えるのは、まず、セラピー最初期のインテークにおけるクライアントの変化が、後続するセラピーによる短期的変化をすでに映し出しているということであろう。もちろん、さらに検証は必要であると思われるが、インテークにおけるダイナミック・アセスメントによって、ブリーフセラピー導入後のクライアントの変化を時間的に予想することが可能になるのかもしれない。

また、インテークにおいて状態不安の下げ

幅が大きかった群がセラピー終了後に特性不安をさらに低減させたこと、インテーク前後において状態不安に変化がなかった群がセラピー終了後からフォローアップにかけて特性不安を低減させていないことは、理論的にも興味深い結果であったと言える。というのは、そこには、クライアントがセラピストとの関係を離れてからも独力で不安感情をさらに静穏化することができるか、変化後の現状を維持するにとどまるかという点で違いがあるからである。

状態不安得点低下群に関して、理論的には次のように考えられるのかもしれない。インテークからセラピーに至るプロセスにおいては精神間で、つまりクライアントとセラピストのあいだでセラピスト側がリードしていた不安感情の静穏機能が終結時点ではしっかりとクライアントに心内化されて、精神内で、つまりクライアントが独力で不安感情の自己静穏を有効に行うことができるようになったことを意味するよう思われる。状態不安得点不変群においては、このような静穏機能の心内化と不安感情の自己静穏が、低下群と比較して不十分な水準に終わったのであろう。

最後に本論の限界と今後の課題である。発達の最近接領域とは、定義としては、まだ成熟してはいないものの成熟中の過程にある機能、あるいは今はまだ萌芽状態にあるものの明日には成熟するような機能を規定するものである。この意味で言えば、本リサーチではインテーク前後における不安それ自体の変化ないし下げ幅を取り上げたことには限界があると言える。というのは、不安そのものではなく、不安を静穏化する何らかの機能こそが発達の最近接領域において論じられるべきであると考えられるからである。つまり、本来であれば不安感情のみならず、顕在的現象としての不安をそのコンテクストから規定している、不安静穏機能の増減も測定すべきではなかったかということである。これについて

は、今後の課題としたい。

文 献

- 肥野田直・福島真知子・岩脇三良ほか（2000）
新版 STAI マニュアル。実務教育出版。
- Lidz CS (1991) Practitioner's Guide to Dynamic Assessment. The Guilford Press.
- Lidz CS & Elliott JG (2007) Dynamic Assessment: Prevailing Models and Applications. JAI Press.
- 田澤安弘・近田佳江（2015）自覚されにくい DV 被害女性のナラティブの特徴とそのサイコセラピーによる変化について。アディクションと家族, 31(1), 39-49.
- 田澤安弘・近田佳江・本田泉（2016）多元的ブリーフセラピーによって介入した社交不安障害の事例ベース研究-自己洞察の変化および自己洞察が思考と感情に及ぼす影響の時系列分析。北星論集, 53, 147-163.
- 田澤安弘・橋本忠行・近田佳江・本田泉（2016）短期療法によって介入した複雑性 PTSD の一女性を対象とする単一事例研究-抑うつの変化および情動知能が抑うつに及ぼす影響に関する時系列分析による検討。アディクションと家族, 32(2), 141-149.
- 田澤安弘・近田佳江（2017）インテーク面接におけるダイナミック・アセスメントのためのマニュアルと、ダイナミック・アセスメント後の情動的及び認知的変化に関する単一事例研究。北星論集, 54. (印刷中)
- Vygotsky LS (1935) 土井捷三・神谷栄司訳
(2003)「発達の最近接領域」の理論：教授・学習過程における子どもの発達。三学出版。

